

症 例

顎嚢胞が疑われた上顎洞粘液嚢胞の1例

松原 誠¹⁾ 式守 道夫¹⁾ 村木 智則¹⁾
川原田 幸司²⁾ 諏訪 裕彦²⁾ 庵原 明倫³⁾
長縄 鋼亮¹⁾ 江原 道子²⁾ 永山 元彦²⁾
田沼 順一²⁾ 住友 伸一郎¹⁾

A Case of Maxillary Sinus Mucocele Mimicking Jaw Cysts

MATSUBARA MAKOTO¹⁾, SHIKIMORI MICHIO¹⁾, MURAKI TOMONORI¹⁾,
KAWARADA KOUJI²⁾, SUWA HIROHIKO²⁾, IHARA AKINORI³⁾,
NAGANAWA KOUSUKE¹⁾, EHARA MICHIKO²⁾, NAGAYAMA MOTOHIKO²⁾,
TANUMA JUN-ICHI²⁾ and SUMITOMO SHINICHIRO¹⁾

緒言：上顎洞粘液嚢胞は、比較的無症状で緩慢に発育することから、画像検査で偶然に発見されることが多い。時に上顎洞とは別に嚢胞病変が存在することがあり、顎嚢胞も考慮しなければならない。また術後性上顎嚢胞と鑑別する必要もある。今回、臨床所見から顎嚢胞を疑われたが、組織像および既往歴から上顎洞粘液嚢胞と診断した1例を経験したので報告する。

症例：57歳の女性。2013年6月に上顎左側臼歯部の欠損を主訴に近歯科医院を受診した。画像検査から上顎左側顎骨内にエックス線透過所見を認め、当院を紹介された。20年前に左側上顎洞炎に対し鼻腔洗浄の既往があった。CT画像で、左側歯槽突起内に直径35mmの境界明瞭な透過性病変を認め、上顎洞との間には菲薄な骨を認めた。病変部のCT値から液体と軟組織の混在が示唆された。歯肉部から開窓して骨を含む病巣の生検を施行した。同時に創部より排出した茶褐色成分含み透明感のあるゼリー状の内容物を採取し、口腔に開窓した。

細胞所見：内容物の細胞診では、背景は炎症性細胞が目立たず、粘液成分を主体に少数の線毛を有する円柱上皮を僅かに認めた。

組織所見：嚢胞壁は僅かな癒痕組織を伴う浮腫性の線維性結合組織が主体を占め、粘液を分泌する線毛上皮で覆われていた。

診断：上顎洞粘液嚢胞

まとめ：今回、顎嚢胞が疑われた上顎洞粘液嚢胞の一例を経験した。上顎洞粘液嚢胞は、顎嚢胞と類似する点があり、診断には慎重を要することが示唆された。

キーワード：上顎洞粘液嚢胞，上顎洞，術後性上顎嚢胞，顎嚢胞

Introduction: Maxillary sinus mucoceles commonly grow slowly, without any symptoms, and are found radiographically. It is necessary that they be distinguished from jaw cysts, as cyst cavities exist separately from the maxillary sinus. In addition, differentiation from the postoperative maxillary cyst is necessary in terms of pathological histology, too. We report a case of maxillary sinus mucocele mimicking jaw cysts by pathological histology and past history.

¹⁾朝日大学歯学部口腔病態医療学講座 口腔外科学分野

²⁾朝日大学歯学部口腔病態医療学講座 口腔病理学分野
501-0296 岐阜県瑞穂市穂積1851

³⁾庵原町中歯科医院

¹⁾Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Division of Oral Pathogenesis and Disease Control

²⁾Department of Oral Pathology, Division of Oral Pathogenesis and Disease Control

Asahi University School of Dentistry
Hozumi 1851, Mizuho, Gifu 501-0296, Japan

³⁾Ihara Machinaka Dental Clinic
(平成25年9月4日受理)

Case Report: A 57-year-old woman consulted her primary care dental clinic seeking dental prosthesis repair of the maxillary left molar area in June 2013. A cystic lesion in the area was identified radiographically and the patient referred to the Department of Oral Surgery of Asahi University Hospital. Her patient history indicated sinus irrigation had been performed for sinusitis 20 years ago. Computed tomography upon first medical examination revealed a distinct permeable lesion with a border of 35 mm in the left alveolar process, and thinning of the bone between the sinus and the lesion. The CT value of the lesion indicated a mixture of liquid and soft tissue.

The mass was fenestrated and a biopsy of the lesion, including the bone, taken. The translucent gelatinous matter containing a dark brown substance discharged from the wound was extracted and the oral cavity fenestrated.

Cytological findings: The preparation revealed mucous materials showing necrotic change. There were some foamy macrophages and hemorrhaging in the mucous material. Additional PAS special staining showed positive for mucous materials in the specimen.

Histopathological findings: The decalcined preparation revealed the cyst wall and alveolar bone were covered with gingiva. The cyst wall was partly composed of edematous fibrous connective tissue with scar tissue formation. There were a certain number of undefined materials near blood vessels, relative inflammatory infiltration, such as basophils, covered with ciliated epithelium and with mucous present.

Summary: We report a case of a maxillary sinus mucocele mimicking jaw cysts. Maxillary sinus mucoceles resemble jaw cysts. This suggests that care should be taken when diagnosing these conditions.

Key words: maxillary sinus mucocele, sinus, jaw cyst

緒 言

上顎洞粘液嚢胞は、比較的無症状で緩慢に発育することから、画像検査で偶然に発見されることが多い¹⁾。時に上顎洞とは別に嚢胞腔が存在するため、顎嚢胞も視野に鑑別診断する必要がある。また組織像からも術後性上顎嚢胞との鑑別に慎重を期す必要がある²⁾。今回、臨床像から顎嚢胞を疑ったが、組織像および既往歴から上顎洞粘液嚢胞と診断した1例を経験したので報告する。

症 例

患 者：57歳，女性。

初 診：2013年6月。

主 訴：上顎左側臼歯部の精査。

既往歴：20年前左側上顎洞炎，2年前に卵巣嚢腫。

家族歴：特記すべき事項はない。

現病歴：2013年6月に上顎左側臼歯部の欠損に対してかかりつけ歯科医院を受診した。X線検査で上顎左側臼歯部顎骨内に透過性病変を指摘され、当院を紹介された。

現 症：顔貌に特記すべき事項はなかった。口腔内では、5に窪みがあるもの歯肉の色調は正常粘膜色であり、腫脹や発赤などはみられなかった(図1)。

画像所見：パノラマエックス線写真で、左上臼歯部顎骨内に境界明瞭で直径35mmのエックス線透過所見

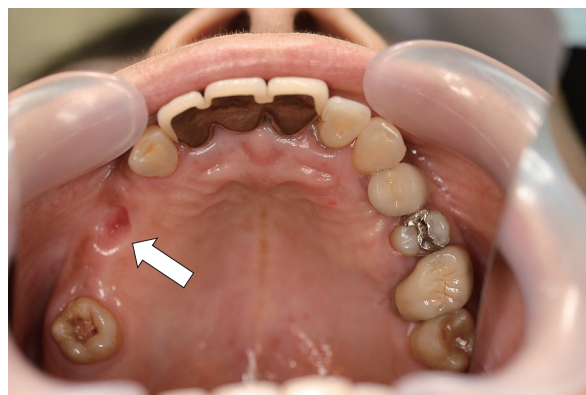


図1 初診時の口腔内写真(ミラー像)

5に窪みがあるものの歯肉の色調は正常粘膜色であり、腫脹や発赤などはみられない。

を認めた。7歯根膜腔は明瞭であった(図2)。CT画像では、左側の歯槽部から上顎洞部に境界明瞭な単房性の透過性病変を認めた。上顎洞壁に著明な膨隆像はなく、一部骨が菲薄するも連続性は保たれていた。病変内部のCT値から液体と軟組織の混在が示唆された。また、上方に位置する上顎洞のX線透過性に異常はみられなかった(図3)。

臨床診断：上顎左側臼歯部顎骨内嚢胞の疑い。

処置および経過：2013年6月、局所麻酔下に上顎左側臼歯部の開窓術を施行した。創部より茶褐色の内容物を含む透明感のあるゼリー状の内容物を採取した(図4)。現在は創部に栓塞子を装着し、副腔の縮小

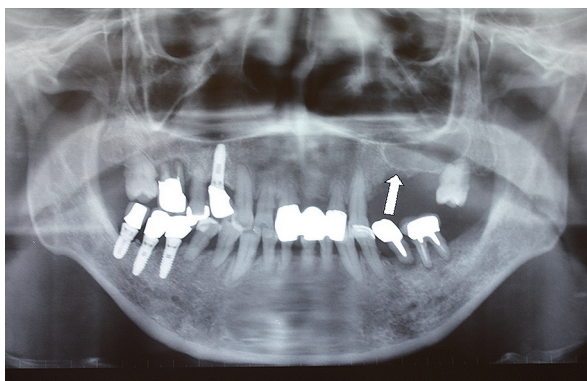


図2 初診時のパノラマエックス線画像
左上臼歯部顎骨内に境界明瞭で直径35mmのエックス線透過像を認めた。[7]歯根膜腔は明瞭であった。

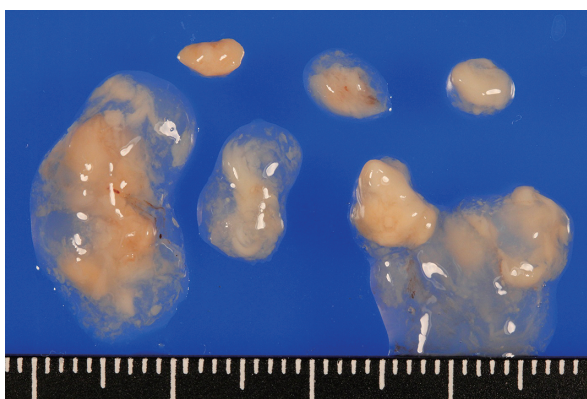


図4 内容物
茶褐色の内容物を含む透明感のあるゼリー状の内容物であった。

をはかっている。

細胞所見：内容物の細胞診では、背景は炎症性細胞が目立たず、粘液成分を主体に少数の線毛を有する円柱上皮を僅かに認めた(図5)。

組織所見：嚢胞壁は僅かな癒痕組織を伴う浮腫性の線維性結合組織が主体を占め、粘液を分泌する線毛上皮で覆われていた(図6)。

最終診断：上顎洞粘液嚢胞。

考 察

副鼻腔粘液嚢胞は前頭洞、篩骨洞に多く、上顎洞での発生は全体の3~10%である³⁾。上顎洞粘液嚢胞の主な原因は、手術侵襲あるいは外傷によって、上顎洞の解剖学的構造が変化し、分泌物の排泄路が閉鎖することによる。また、ポリープや腫瘍、鼻中隔彎曲なども、自然孔からの分泌物排泄を滞らせる。前頭洞、篩骨洞に発生した粘液嚢胞は眼球突出、複視などの眼症状を呈することが多い^{4,5)}が、上顎洞粘液嚢胞は比較的無症状で緩慢に発育するため、画像検査で偶然に発見



図3 初診時のCTエックス線画像
左側の歯槽骨から上顎洞部に境界明瞭な単房性の透過性病変を認めた。上顎洞壁に著明な膨隆像はなく、一部骨が菲薄するも連続性は保たれていた。

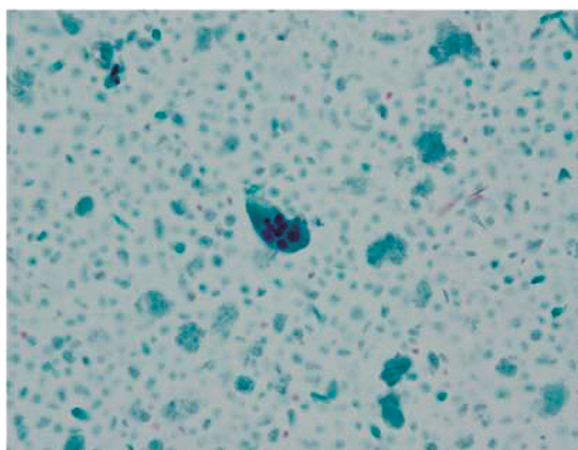


図5 細胞写真(パパニコロウ染色)
背景は炎症性細胞が目立たず、粘液成分を主体に少数の線毛を有する円柱上皮を僅かに認めた。

されることが多い。特徴的な画像所見は、上顎洞のX線透過性の減少と、平滑な弧状の骨吸収像を認めることである。その辺縁は骨硬化像を示す場合も多い⁶⁾が、必ずしも全周にわたって認められるものではない。拡大した症例では、嚢胞周囲の骨が一部欠損し、頬部軟組織、鼻腔内あるいは眼窩内への進展が認められることもある。また、本来の上顎洞とは別に嚢胞腔が認められる場合が多く、周囲の骨吸収所見はより明瞭となり、粘液嚢胞の範囲もある程度確認できる。類似するX線像を示す疾患として歯根嚢胞、残留嚢胞、角化嚢胞性歯源性腫瘍などの顎骨内腫瘍および嚢胞、上顎洞炎などがあげられるが、これらは臨床症状と画像からは鑑別困難であるが、組織像により診断することができる。

組織所見では、嚢胞壁は癒痕組織あるいは粘液腺を有する炎症性上顎洞粘膜からなり、本来の上顎洞とは

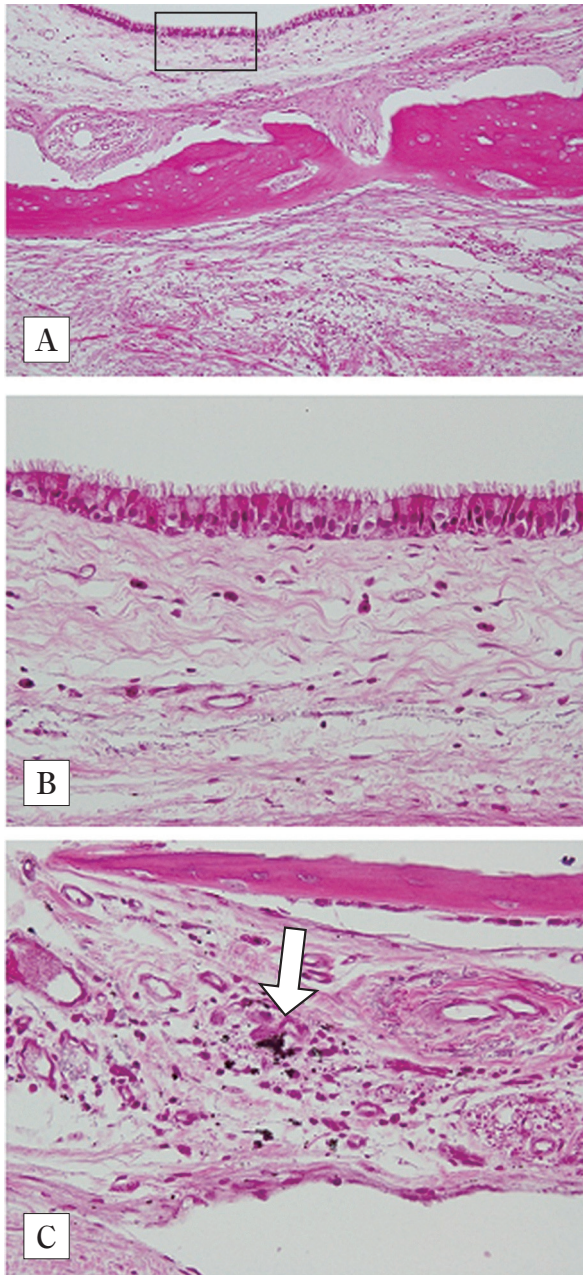


図6 組織写真 (HE 染色)

- A. 弱拡大. 浮腫性の線維性結合組織が主体を占める。
 B. 強拡大. A の□部分を拡大: 粘液を分泌する線毛上皮で覆われていた。
 C. (矢印) 僅かな癒痕組織を伴う。

別になっていることが多い⁶⁾。嚢胞内面は、線毛上皮、円柱上皮で覆われていることが多いが、立方上皮、扁平上皮で覆われていることもあり、上皮層を欠く部分もある。内容物の性状はさまざまで、黄色から暗褐色を呈し、漿液性あるいは濃厚な粘液性を示し、時にはコレステリン結晶を含むことや膿性な場合がある。ま

た、組織像から鑑別すべき疾患として、術後性上顎嚢胞がある。この嚢胞は、1927年に久保が buccal cyst として最初に報告した⁷⁾。本邦におけるすべての顎嚢胞の19.5%と報告され、主な原因として①根治術の際の残留した洞粘膜または粘膜腺の一部が癒痕組織内に埋没され、分泌物の貯留が起こって嚢胞ができるという貯留嚢胞説、②術後の出血ないし創傷の分泌物が組織内に残存してできる間隙嚢胞説、③再生上顎洞が自然死、対孔の閉鎖によって孤立して成立する閉鎖腔説などの発生説などがある⁸⁾。外科手術や外傷により線毛上皮の一部が取り込まれ残存することに起因すると考えられ、内容物は粘性に富むともある。しかし、上顎洞根治術から嚢胞摘出までに長期にわたる場合は、粘液嚢胞と鑑別することは困難になると報告されている²⁾。ただ、自験例では上顎洞炎の既往があるものの、術後性上顎嚢胞の定義である上顎洞根治術の既往はなく、上顎洞粘液嚢胞と考える方がふさわしい。

現在、開窓術を施行後は経過観察しているが、副腔が閉鎖するまで注視する必要があると考える。

結 語

今回、画像所見から顎嚢胞が疑われた上顎洞粘液嚢胞の一例を経験した。上顎洞粘液嚢胞は、他の顎嚢胞と類似する点があり、診断には慎重を要することが示唆された。

文 献

- 1) Sammartino FJ. Radiographic appearance of a mucoid retention cyst. *Oral Surg.* 1965;20:454-455.
- 2) Basu MK, Rout PG, Rippin JW and Smith AJ. The post-operative maxillary cyst. Experience with 23 cases. *Int J Oral Maxillofac Surg.* 1988;17:282-284.
- 3) Montgomery, WW. Mucocele of the maxillary sinus causing enophthalmos. *Ear Nose Throat J.* 1964;43:41-44.
- 4) Nakayama T, Mori K and Maeda M. Giant pyocoele in the anterior intracranial fossa-case report. *Neurol Med Chir.* 1998;38:499-502.
- 5) Voegels RL, Balbani AP, Santos Júnior RC and Butugan O. Frontoethmoidal mucocele with intracranial extension: a case report. *Ear Nose Throat J.* 1998;77:117-120.
- 6) 内田安信, 河合幹, 瀬戸皖一 編集. 顎口腔外科診断治療大系. 東京: 講談社:1991:602-603.
- 7) 久保猪之吉. 上顎洞根治手術に現われたる頬部嚢腫. 大日耳鼻. 1927;33:869-897.
- 8) 白砂兼光, 古郷幹彦 編著. 口腔外科学. 第3版. 東京: 医歯薬出版:2010:306-307.